
真・恋姫†無双 ～乱世に舞う鳳凰～

仁義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～乱世に舞う鳳凰～

【Nコード】

N7127M

【作者名】

仁義

【あらすじ】

時は、漢王朝時代……………漢王朝は腐敗し、天下は大いに乱れた……………各地には賊が溢れ、民は苦しみ救いを求めた……………

そんな時代が始まってから数年が過ぎた頃、民達の間にとある噂が流れた、幽州の占い師管輅がとある予言をしたと言っているのである。

幽州に鳳凰を名乗る者降り立つ……………

その者、過去に闇背負うも……………

それ故に光もたらず……………

鳳凰が降り立つは北方……………

されど、その翼羽ばたかせ飛翔するは南方……………

鳳凰が朱雀の地に来る時……………

新たなる救いの物語が始まる……………

今、新たな外史が始まる。

プロローグとある予言

時は、漢王朝時代……………漢王朝は腐敗し、天下は大いに乱れた……………各地には賊が溢れ、民は苦しみ救いを求めた……………

そんな時代が始まってから数年が過ぎた頃、民達の間にとある噂が流れた、幽州の占い師管輅がとある予言をしたと言っているのである。

幽州に鳳凰を名乗る者降り立つ……………

その者、過去に闇背負うも……………

それ故に光もたらず……………

鳳凰が降り立つは北方……………

されど、その翼羽ばたかせ飛翔するは南方……………

鳳凰が朱雀の地に来る時……………

新たなる救いの物語が始まる……………

その予言を聞いた者達は様々な反応を示した……………

幽州、桃花村を守る恋姫たちは鳳凰を見つけるために旅立ち……………

……………

とある霸王は自分と覇を競う者の登場を喜び……………

とある南方の小霸王は鳳凰が己の近くに降り立たぬことを悔しがり

……………

とある北方の優しき少女は鳳凰と会うことを望んだ……………

そして……………

「さてと、準備は整ったな」

予言にありし鳳凰と呼ばれる青年は、いま……………

「しかし、まさかあのような大軍に一人で挑むことになるとは、俺も無茶をするものだ、まさか……………」

五千の族に対し一人とはな。」

いきなり最大の危機を迎えていた

「まあいい、村人も避難させたことだし。」

そして鳳凰は、獣達に相対し、

「さあ、参る！」

無謀な戦いを始めた……………

そして時を同じくして……………

「ん？なにやらこの先が騒がしいな。」

「どうしたのでしょうか？村までは、まだ距離があるはずなのに
すが……………」

「なんかあったのか？」

先に記した恋姫もまた、鳳凰が飛翔すると言われし地に来ていた。

恋姫たちと鳳凰の出会いに近い……………

第一話に続く

第一話　恋姫達、とある村の危機を知るのこと（前書き）

注意！この小説にはストーリーの都合上、桃花こと劉備が出ません。
桃花ファンのかた、お許し下さい

第一話　恋姫達、とある村の危機を知るのこと

鳳凰が無謀な戦いを始めた頃……………

とある森の中を、数人の女性の一団が歩いていた。

「愛紗　まだつかないのか　お腹透いたのだ」

その中の一人、赤い髪の少女が黒髪の女性に不満そうに言う。

愛紗　仕方無いだろう、予言にあった鳳凰と呼ばれる方は、はっきり何処に降り立つかまでは伝えられていないのだからな。」

「え　じゃあ後どれだけ歩けばいいのだ」

「まあまあ落ち着けて鈴々」

愛紗と呼ばれた女性とは違う茶色の髪を頭の後ろで結んだ女性が鈴々（赤髪の少女の名前らしい）に言う。

「確かもう少し先に村があるはずですよ、朱里ちゃん。」

紫髪の女性が黄髪で帽子を被った少女に言う。

朱里「はいたぶん後少しで着くと思います紫苑さん。」

「だってよ、鈴々」

鈴々「むゝわかったのだ、そこまで我慢するのだ。」

「やれやれ、鈴々や翠（茶髪の女性の名前のようだ）にも困ったものだ」

水色の髪の女性が呆れたように言う。

翠「なつ、星！（水色髪の女性の名前らしい）あたしは鈴々みたい
にさわいでいないぞ！」

星「おや、そうだったか？その割には、今日も朝早くから鈴々にか
らかわれていたようだか？寝ている私にも聞こえたぞ（笑）」

翠「いや、あれは／＼／＼ていうかお前あの時おきてただろうが！」

星「おやおや気づいていたか、私はてつきり……………」

翠「てつきりなんだ星……………」

星「ふふふ、さてはてなんだろうな」翠

翠「せ……………」

愛紗「やめないか！星も翠も！少しは静かに歩けないのか！」

翠「す、すまない。」

星「ふむ、少しからかい過ぎたか、すまんな愛紗」

愛紗「まったく、いつもいつも、少しは静かにだな……………」

紫苑「まあまあ？愛紗ちゃん、少しは落ち着いて……………」

紫苑が愛紗をなだめようとした時……………

ガサガサガサッ！！！

近くの草むらから突然音がする。

一同「ッ！！」

翠「な、なんだ！」

愛紗「クッ！賊か！」

武将達全員が身構える、が……………

ガサガサガサガサッ！！！

「はあ、はあはあ、はあ」

一同「なっ！」

出てきたのは傷だらけの農民だった。

鈴々「ど、どうしたのだ！」

翠「おい！大丈夫か、何があった。」

「む、村が、賊に……………」

愛紗「なんだと！詳しく聞かせろ！」

「こ、この先の村が、賊どもに、ウグッ！」

紫苑「大丈夫ですか！？」

農民はとある方向を指さし気絶していた。

翠「おい、こいつが言ってたのって……………」

朱里「はわわ、たぶん翠さんが考えている通りだと思いましゅ。」

星「ふむ、となると、愛紗。」

愛紗「ああ、放ってはおけないな。」

翠「ああ、たしかこいつ「この先の村が」って言ってたよな？」

愛紗「ああ」

紫苑「では、この人は助けを呼びに来たのでしょうか。」

朱里「たぶん、そうですね。」

鈴々「じゃあ、速く行って他の人達を助けるのだ！」

愛紗「そうだな、よし皆行こう。」

全員「応！（はい！）」

そして愛紗達は農民が指差した方向へ向け走り出した……………

▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲

愛紗「どうやらあそこのような。」

翠「ああ、確かに随分な数の賊がいやがるぜ。」

朱里「でも、まだ村には侵入していないようですけど……………」

星「確かに……………ん？おい皆あれを見ろ！」

星の言葉に反応して全員が星が指差す方を見る。

翠「おいあれって……………」

そこでは赤髪の青年が賊と戦っていた。

翠「まさか、あいつあの数と一人で戦ってんのか！？」

星「そのようだな、さて皆どうする？私としてはすぐにでもあの者に助太刀したいところなのだが。」

鈴々「そんなの決まってるのだ！」

愛紗「うむ、我らも助太刀にいくぞ！」

全員「応！」

そして愛紗たちは戦場に向かい走り出した……………
そして、これが後に乱世を碎くため立ち上がる『鳳凰』と『恋姫』
たちの出会いに繋がるのであった……………

真・恋姫†無双

第二話に続く……………

第一話、恋姫達、とある村の危機を知るのこと、（後書き）

次回予告

恋姫たちは鳳凰の窮地に駆けつける

「その御仁、ご無事か！」

「ああ、なんとかな。」

そして鳳凰は名乗る、己の名を

「俺は王公！王公天覇だ！」

鳳凰と恋姫達の出会いは、この乱世に何をもたらすのか。

次回、第二話・鳳凰と恋姫、
ご期待ください。

第二話ゝ恋姫、鳳凰に助太刀することゝ（前書き）

長らくお待たせしました、第二話投稿です。

第二話　恋姫、鳳凰に助太刀すること

s a i d 賊

おかしい……………

戦いが始まってから村を襲った……………いや、正確には襲おうとした（……………）賊の頭目はそればかり考えていた。

ただの小さい村を襲うだけ、そう考えていた、ただ単になんの戦力も無い村……………実際は一人の男が向かってきたが、それもすぐに倒し、その後村を襲い、殺し、奪う、ただそれだけ考えていた。だからこそ思う、おかしい……………

何故自分達はまだ村どころか村の入口にもたどり着けていない？自分達の方が数は多い筈なのに何故、たった一人の男に阻まれている？

何故……………

自分はあるな遠くで仲間に囲まれている男に恐怖を抱いている？

「か、頭あ！」

ハッと我に帰り声の方を向く

「ど、どうしたあ！」

動揺しながらも声を発した者に何があったかを聞く。
だが……………

「そ、それが……………」

その者の報告を聞いた瞬間

あの男とは違う方から、やたら強い奴らがいきなり現れました！」

賊の頭に絶望の二文字が浮かんだ……………

said 愛紗一行

愛紗「これは……………どういうことだ？」

一方、賊に突撃した愛紗達（朱里と紫苑は後方待機）も戸惑っていた、愛紗達からすれば突撃した後向かってくる賊を倒しながら戦っている男の所に向かうつもりだった（提案者は朱里）だが……………
…こない、先程名乗りをあげながら近くの賊を十人程斬ったので自分達の存在には気づいている筈なのだが……………
………いつこうにこちらに向かってくる気配が無いのだ。

翠「どうなってんだ？」

鈴々「なんで誰も向かってこないのさ？」

星「ふむ、確かに妙だな、まるで私達のことは眼中にないと言わんばかりの対応だ。」

翠「いくら賊だからってそこまで馬鹿じゃないだろ、仲間が殺されて黙っているはずないしさ。」

愛紗「確かに妙だが、これは逆に好機だな、この機に乗じて先程戦っていた者に助力を「待て愛紗」ん？どうした星？」

星「どうやら、その必要はないようだ。」

翠「は？何言つてんだよ星、早く行かないとあいつがやばいだろ。」

星「いや、それでも無さそうだぞ、見る。」

そう言いながら、星が村のある方角を指差す。

翠「ん？なんだよ」

鈴々「何があるのだ？」

全員がその方向を向き……………

星以外「なっ！？」

全員が一様に驚いた

人が、舞っている……………

舞っているといっても別に吹き飛ばされている訳ではない、一人の男が、文字通り舞っているのだ……………空を

賊の中央で跳び上がり、紅色と朱色の中華刀で賊の首を飛ばし、そのまま他の賊の頭や肩を蹴飛ばしそのまま宙を舞いながら賊を斬り、

突き、蹴飛ばす、それらの動きが合わさり正に舞を踊っているかのような動きになっているのである

翠「すげえ……………」

翠の言葉は愛紗達全員の心を代弁していた

愛紗達も大陸各地を旅し、色々な武人に会ってきたがここまで正直に「美しい」といい表せるような武には会ったことがなかった

愛紗「はい、いかん！ぼーっとしている場合では無い！」

翠「あ！そ、そうだな、いくらあんなすげえ奴でもあそこまでの数相手に一人じゃばい」

星「ふむ、それもそうだな、では一つ行くか愛紗？」

愛紗「ああ、そうだな、行くぞ皆！」

全員「応！！！（なのだ）」

愛紗達は賊と青年が戦っている場所目掛け突撃していった……………

said 鳳凰

「くっ！やはり五千相手に一人は無謀だったか……………」

一方、愛紗達からは余裕に見えた青年も実は苦戦していた、確かに敵の攻撃を受けてはいないが五千を相手に一人、その上武器は大多

数に適していない双刀だからである

「ちっ、せあっ！」

その為敵に負わせる傷が浅く、中々敵がへらない、更に傷を負わせた敵の後ろから新たな敵が現れる、完璧な悪循環である

「くっ、少し不味いか……………」

そして、数が減らないということは戦っている相手にはかなりの精神的負担になる

「はぁ、はぁ、はぁ、くそっ」

更に敵の状態、特に疲労状態は戦っている者にはかなり伝わりやすいものである

「へ、へへっ、やっとへばったみてえだな、いまだ野郎共！一斉にかかれ！」

先程まで青年の戦い振りに恐怖を憶えていた賊の頭目も青年の疲れに気付いたのか強気になって攻め始める……………が、この時賊の頭目はきずくべきであった

ざしゅー！！

「ぎゃあああ！」

「な、なんだ！？」

自分達の敵が……………

「我が名は関羽！関羽雲長！乱世に乘じ民を脅かす賊どもよ、我が青龍偃月刀の鎔となれ！」

目の前の青年だけではないということ……………

「んなっ！ま、まだいやがったのかよ！」

「う、うわあああ」

突然敵が現れば誰でも動揺する、ましてそれが一人の敵に集中している場合だと更にその動揺は大きい

「何だ、援軍か？」

そして、援軍というものは苦戦している者にはかなりありがたいことである

「誰かは知らんがありがたい、さて、となるといまが好機か」

援軍の登場を好機とみたか青年が賊の頭目を目指し走り出す

「今なら奴らの頭を討つ絶好の機会だ」

実は青年が苦戦していた理由はそれなのである、一人で多数の敵を相手にする場合、まず頭を討つことで敵の統率と士気を無くして混乱させることがかなり有効であり、この青年もそれを狙って戦って

いたが、この賊の頭目はかなり臆病だったようで後方から指示を出すだけだったのだ、その為頭目の所へたどり着けず苦戦していたというわけである

だが、自分でも予想外だった突然の援軍により頭を討たずとも敵は崩れている、この氣に頭を討ち敵を完璧に崩壊させるのが狙いなのである

「ひ、ひiiiiiiii！だ、だめだ、あんなやつらに勝てる訳ねえ！」

突然の援軍により完璧に恐れをなした頭目が戦場から逃げようとする、だが……………

「悪いが逃がさん！」

青年は頭目の乗る馬が走り出す前に追いつき……………

「せえあつ！！！」

ザンツ！！

首を斬り裂いた、これにて臆病な賊の頭目の生は終焉を迎えたのである……………

「賊どもよ！貴様らの大将は討ち取った！死にたくなくばすぐさま退け！逆らうならば、その命を散らす覚悟をせよ！」

「ひ、ひiiiiiiii！！！」

頭目を討たれた賊は散り散りとなって逃走し、最後まで逆らった者

も青年や愛紗達に討たれた、これにてこの戦いは幕を閉じたのである

s a i d 愛紗

「ふう、すまんな誰かは知らんが、助かった」

私達は賊を蹴散らした後、紫苑達と合流し、先程戦っていた者にあつてた

愛紗「いえ、相手が賊とあれば私達にとっても敵、手を貸さないわけにはいきません」

「それでもだ、助かったのは事実だからな」

星「気にすることはあるまい、それに貴公ならあの程度の賊、大した脅威ではなかったと思うがな」

「いや、実際かなり苦戦していたからな、本当に助かったよ」

彼の様子を見る限り、どうやら本当に苦戦していたらしい

「それで貴女方は？兵を連れていないところを見ると、官軍ではないようだ………」

そう言われて始めて自分達がまだ名乗っていないのに気付いた

愛紗「失礼した、私は関羽、字を雲長という」

鈴々「鈴々は張飛、字は翼徳なのだ！」

星「私は趙雲、字は子龍だ」

朱里「私は諸葛亮、字は孔明です」

翠「あたしは馬超、字は猛起だ」

紫苑「私は黄忠、字は漢升と申します」

と、私達が名乗ると彼は少し驚いたような顔をした

「ほう、とすると貴女方があの桃花村の義勇軍の………」

翠「え？あたし達のこと知ってるのか？」

「ああ、幽州では割りと有名だぞ、特に関羽殿はな」

愛紗「そ、そうですか」

自分が有名だということが少し照れくさかった

星「して、貴公は？」

「おお、そういえば俺もまだ名乗っていなかったな………」

そして彼は

俺は王公、字を天覇だ！よろしく頼む！」

これが私達と、後に私達の主になる王公殿との出会いだった……
……

第二話〜恋姫、鳳凰に助太刀すること〜（後書き）

愛紗のキャラ、おかしくなかったでしょうか？

感想、ご指摘、お待ちしております

追記・次回も投稿はかなり遅れると思われるので、気長にお待ちください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7127m/>

真・恋姫†無双 ～乱世に舞う鳳凰～

2011年10月7日02時21分発行